

演心力～広げよう演劇の輪～

講評速報 7号

12月25日(水)

【三重】	高田高等学校
変	
<p>女子のズボン・ネクタイの着用が校則で認められたことをきっかけに周りの人間が様々に変わっていく中、ハルカだけはその変化を素直に受け止めることができずに悩む。「…私、変？」</p> <p>登場人物の人数より多くの椅子や机が置かれているため、壁や戸・窓が無くても教室という感じがよく表されていた。三角形のパネルの上下が変わることによって、制服の変化を表す工夫がされていた。最後の場面でハルカが真ん中の逆三角形のパネルのところに立ったのは、あくまでスカートにこだわるハルカとズボンをはきたい女子の対比を強調しているのではないかと考えた。</p> <p>場面転換で使われたサンバのアップテンポな曲調は、ハルカの周りの人間が目まぐるしく変わっていく様子を表していた。また、その時の激しく明滅する照明からはハルカの心の迷いが感じとれた。ハルカを取り囲む椅子の数が一つずつ増える演出は、彼女が追いつめられいく様子を巧みに表現していた。タケシとヒロのノリの良い会話（テンポの良いセリフの掛け合い）は、教室内の日常をうまく表すなど、登場人物の心理や関係性の変化を表すのに効果的な工夫が至る所に見られた。</p> <p>リスクした過去を忘れられないミーナが、ハルカが奪ったカッターナイフをなぜチアキに返したのかという点については、講評委員の中でも意見が分かれた。リスクしたくない人にとってはミーナの意図が理解しづらかったが、「ミーナにとってリスクは『変』なことではないから渡した」という意見や、「リスクを止めることで、それ以上のことをチアキにさせたくなかったからではないか」という意見があった。</p> <p>男女の平等やLGBTについて多様性に配慮しようという風潮がある中、ハルカの抱く葛藤には考えさせられるものがあった。社会の流れについていけない人が、自分自身を変だと責めてしまう世の中は、果たして本当に社会＝誰にとっても住みやすい世の中と言えるのだろうか。また、「普通」とは「平等」とは何なのだろうか。人数が多ければ「普通」少なければ「普通ではない」という、無意識のうちに誰もが抱いてしまう先入観や固定観念を根本から揺さぶる劇だった。</p>	